**メッセージのレジュメ**

**2021年4月18日（日）**

**聖書箇所：ハガイ書１章１節～１５節**

**タイトル：「神殿再建への道」**

＊①～⑥は、エルサレム帰還、神殿再建に用いられた人々

　紀元前５３９年　**ペルシャの①クロス大王**がバビロンを滅ぼす。

（クロス大王在位紀元前５５９～５２９年）

　紀元前５３８年　第１回帰還　５万人のユダヤ人が帰還

**②ゼルバベル**と**③ヨシュア**の指導のもと総数42,360人（エズラ２章）が帰還

この時からユダヤ人と呼ばれる　多くの人がユダ族出身であったため。

ゼルバベルは、政治的リーダー、ヨシュアは、大祭司であり宗教的リーダー

ゼルバベルは、第二回補修の時にバビロンに連れていかれたエホヤキンの孫

紀元前５３６年　**神殿再建工事着工**　エズラ３章８節

工事の指揮者は、２０歳以上のレビ人。

しかしサマリヤ人の妨害により工事中断　エズラ４章

　紀元前５２９年　**クロス大王の死**

　　　　　　　　　代わってキュロス大王の息子、**カンビュセス２世**が王となる。

* **工事の中断期間１４年**。ダリヨス王の治世の２年まで

　紀元前５２２年　**カンビュセス２世の死**

**ダリヨス王就任**

紀元前５２０年　**神殿工事再開**　エズラ４章２４節、ハガイ１章１５節

紀元前５２０年　その時に主が立てられたのが預言者**④ハガイ**（６月）、**⑤ゼカリヤ**（８月）

ハガイとゼカリヤの言葉に励まされて、ゼルバベルとヨシュアは反対を恐れずに

工事を再開した。

ハガイの活動期間は、４ヵ月間

ゼカリヤの活動期間は、約５０年

・二度目の妨害

総督タテナイをはじめ国の指導者がやってきて誰の命令によって神殿を再建しているのかと訴えてきた。そこで**⑥ダリヨス王**に訴状が送られた。エズラ５章７節～１７節

ダリヨス王の命によりバビロンにある王の宝物蔵を探すと、クロス王の文書が見つかった。ダリヨス王は、工事の援助と神殿器具の返還を命じる。またペルシャの王のために祈れと命じた。エズラ６章

紀元前５１６年　**第二神殿完成　完成奉献式**

　　　　　　　　　神殿再建が着工されてから２０年の経て完成。

◎ハガイ書

　バビロン捕囚となった民がペルシャのクロス王がバビロンを打ち破ると同時に捕囚民の帰還を許可。第一回帰還民として約５万人が帰還し、神殿再建に取りかかったがサマリヤ人の妨害に遭い、１４年間の工事中断。

　主の約束を信じ、祖国再建の希望に燃えた帰還民でしたが、大きな挫折を味わう。そのような時にイスラエルの民を励ますために神様によって遣わされたのが預言者ハガイと預言者ゼカリヤ。

**１．神様の御心、導き、神様が喜ばれることだと信じて進んでいってもすべてがスムーズに進むわけではないということ**

例：・アブラハム、モーセなどなど

・考えられる理由

信仰が試されている。訓練。忍耐を学ぶため。祈ることを学ぶため。自分の動機を確認するため。

南ユダの民は？

挫折の中で、今は神殿再建の時ではなく、まずは自分たちの生活を立て直す時だ。神殿再建は、自分たちの生活が落ち着いてから、安定してから、力をつけてからと思い、自分の生活の安定のために動いていた。

主は、「今、万軍の【主】はこう仰せられる。あなたがたの**現状をよく考えよ。**」（ハガイ書１章５節、７節）と語られた。

**２．神様の御心、神様が喜ばれることだと信じて進んでいってもすべてがスムーズに進むまない時、立ち止まって自分の現状を考えるということ**

主がイスラエルの民に「現状をよく考えよ」と語れたように、私たちも時に立ち止まって自分の霊的状況、神様との関係、優先順位、人生の目的、夫婦の関係、親子の関係、教会における礼拝、奉仕や献金の姿勢、伝道においてどう取り組んでいるのかなどを祈りの内にチェックすることが大切。

「17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」（黙示録３章１７節）

**３．信仰生活における戦いにおいて私たちは一人ではないということを覚えること**

　神殿再建に取り組みましたが、妨害に遭い、１４年間もの長きに渡って工事が中断しましたが、その時に主は、彼らを励ますために預言者ハガイとゼカリヤを遣わされた。二人の励ましよって人々の心は再び奮い立ち、工事を再開させ、４年後に完成を見た。

　私たちも信仰生活の中でスランプに陥ったり、その戦いの中で弱さを覚えることがある。ます。その時私たちが覚えたいことは、私たちは一人ではないということ。神の家族である信仰の友と弱さを課題、悩みを分かち合い、祈り合い、励まし合って共に主が成してくださる御業を見ていく。それが信仰者の歩みである。信仰の友の存在は、私たちの信仰生活において決して欠かすことができない存在であることを覚えたい。